

< 研究ノート > :

1 . シドニー・オリンピックを「読む」

— スポーツ研究とカルチュラル・スタディーズ —

高津 勝

、「メディア・イベント」と話題の創出

2000 年 9 月中旬から 17 日間、20 世紀最後のオリンピック大会がシドニーで開催された。吉見俊哉の所論に従えば、シドニー五輪は、メディアが主催するイベント、メディアが媒介するイベント、メディアによってイベント化される現実という、3 つの性格を合わせ持つ「メディア・イベント」ということになる(1)。では、シドニー五輪はメディアによってどのように報道され、それを介してどのような現実が作り出されたのか。

大会閉幕直後の『朝日』は「取材記者座談会」を掲載し、「日本選手団は金メダル 5 個、メダル総数 18 個という、惨敗のアトランタ五輪よりも、わずかながら上向きの成績を収めた」としながら、つぎのようなトピックを取りあげている(2)。

第 1 は、開会式における韓国と朝鮮民主主義人民共和国の合同行進の実現とその「感動」、および、それを実現させた IOC への賞賛。第 2 に、選手・関係者の輸送や会場警備など、比較的順調に行なわれた大会運営。第 3 に、柔道の笠原の「誤審」問題に象徴される、一部審判のレベルの低さ。第 4 に、柔道頼みの日本選手団のメダル数と女性選手の活躍。第 5 に、プロ野球選手の派遣問題と統一チームの編成をめぐるプロ・アマ両球界の確執。第 6 に、海外の選手を含めたスター選手の不在。第 7 に、五輪運動を世界に広めるために IOC が特別枠で参加を認めたエリック・ムサンバニ選手（赤道ギニア、男子 100 ㉒自由型）の 1 分 52 秒 72 にわたる懸命な泳ぎと、観衆の拍手喝采。第 8 に、技量の優劣にかかわらず、好プレーに対しては一斉に歓声と拍手で反応し、心の底から観戦

を楽しむオーストラリア人の成熟した観衆態度。第 9 に、ドーピングの続発と国際競技団体の手ぬるい規制措置（スター選手を出場させるために出場停止期間を短縮）。

さて、大会期間中の競技の様子は逐次、全世界に伝えられ、日本国内のテレビ視聴率は、前回のアトランタ五輪をしのぐ好成績であった。サッカー男子・日本代表戦の視聴率は 4 試合すべてにわたって 20% を越え、高橋尚子がトップでゴールした女子マラソンの中継は 40.6%、田村亮子の出場した女子柔道 48 ㉒級決勝は 19.4%（夕刻の録画放送では 30.7%）であった(3)。好調な視聴率について、メディアの側は、「泣いたり喜んだり怒ったり。（中略）日本代表の活躍だけでなく、スポーツそのものが持つ喜怒哀楽にあふれたドラマ性が支えた。(4)」と分析している。「選手たちが残した『言葉のメダル』(5)」も、競技のドラマ性を高めるうえで大きな役割を果たした。

「五輪の金メダル。この瞬間を味わうために。頑張ってきた。今は夢のよう。初恋の人に、やっとあえたような気持ち」と、喜ぶ田村亮子。

「くやしー。あーん。めっちゃ、くやしいです。金がいいですー。」と悔しがりながら、同時に「りっぱです」とライバルを讃える田島寧子。

42.195 ㉒を「自分の世界」にして楽しく走り抜け、「みんなの後押しがあって、楽しく走れました」と周囲の人に感謝の気持ちを忘れない高橋尚子。

「銀メダルに終わって、悔しい。感想も何もない。弱いから負けた。それだけです。ドイエはやっぱり強かった。誤審？ 不満はありません。」と、判定の結果を冷静に受けとめようとする柔道男子 100 ㉒超級の篠原信一。等等。

スポーツは「筋書きのないドラマ」だといわれる。全力を出し切った選手たちの姿と端的な言語表現が重なり合い、さまざまな話題や物語が紡ぎだされ、集団的な記憶となって人々の脳裏に蓄積されるのである。メディアの果たす役割は大きい。

・スポーツ報道の両義性

多くの人々が選手たちのパフォーマンスから「夢」と「感動」、「勇気」と「元気」を受け取った。その意味において、「日本代表の活躍だけでなく、スポーツそのものが持つ喜怒哀楽にあふれたドラマ性」がテレビ視聴率の好調を支えたという、メディアの自己分析は正鵠を射ている。だが、メディア側は、それを予測し、当初からそれにふさわしい報道姿勢をとっていた。たとえば、開会式を報道した『朝日』は、同じ紙面に長崎宏子（ロス五輪競泳選手）の「結果がどうであれ、スポーツにかけける思いは必ず伝わります。そんなメッセージをどんどん発信してくれるのを待っています。(6)」と、メダルよりも「泳げる感動」を味わうことを勧める応援メッセージを掲載している。

閉幕直後の西村欣也（編集員）の記事は、「プレッシャーと正面衝突するのではなく、軽やかに重圧をかわしてみせた」点に女性選手躍進の秘密があるとし、「田島寧子。人はあんなにうれしそうに、悔しがることができる。(中略)田島のあの姿に元気をもらった人は少なくないだろう。(7)」と。

加えて、高橋選手と小出監督に授与した朝日スポーツ賞特別賞の紹介記事。その見出しは『『楽しいから』気負いなし。(8)』である。

成績だけでなく、「人間の持つ強さと弱さ、可能性」という観点からアスリートを活写したことも、今回の五輪報道の特徴であった。たとえば『朝日』は、「決して楽ではない。できれば逃げたいほどなんだけど……一生に何度味わえるかという緊張があるのが五輪。それがあってこそ、世界に出て行こうという気持ちがかきたてられる(9)」という伊東浩司（陸上短距離）の閉幕時の発言を載せ、「人類の前進アテネに引き継ぐ」という見出しの

総括的な記事でも、「シドニー五輪が示した、人が持つ強さと可能性と弱さ。……不完全であるがゆえに、五輪は人間に前進を求め続ける。(10)」と、アスリートの人間味を強調している。

以上のように、メディアは、一方で勝敗や競技成績を丹念にフォローしながら、他方ではスポーツの持つ「ドラマ性」に着目し、それに対応した報道内容やメッセージを私たちに発信した。その意味で、競技や選手のパフォーマンスに関するメディアの報道姿勢は両義的である。

・「虚構」と「ポリティカル・コレクトネス」

閉会の挨拶でサマランチは、「開会式で韓国と北朝鮮が合同行進をしたように、五輪を通じた平和が現実のものになることを示した。I O C会長として、これ以上のものはない。過去最高の五輪だったことを宣言したい。(11)」と、自画自賛した。

『朝日』もまた、「五輪に託す新世紀の夢／南北、手つなぎ行進／戦争の世紀終わり 和解の風(12)」から「つないだ手 新世紀へ／シドニー五輪閉幕(13)」に至るまで、五輪精神の宣揚に努めた。だが、祝祭と実世界に関する構造的な認識を欠き、あるいは、現実の五輪に対する批判や市民運動の意義や役割を十分に把握しない場合、祝祭の場での理想の宣揚は、往々にして、現実を追認しないし容認することになりかねない。

そうしたなか、坂口智（朝日新聞社シドニー支局長）の「ニュースの視点／シドニー五輪・宴終わり残った問いかけ(14)」は、ハワード首相が、アボリジニの血を引くフリーマン選手の金メダルを「立場の違いを超えて、すべての豪州人をより強く結びつけた」と絶賛しながら、他方では、先住民の子供を親から隔離し白人社会への同化を強制した政策への「謝罪を一貫して拒否している」ことを伝えている。加えて、坂口は「宴は終わり、豪州は日常に戻らねばならない。」「今回の五輪を単なる『大パーティー』で終わらせるか、新たな前進への起爆剤とするか。答えを出すのは豪州人自身だ。」と、祝祭の理念の現実への反転を求めて

いるのである。

杉本良夫（豪ラトロープ大教授・比較社会学）の「少数派重視のシドニー五輪／『融和』の陶醉と宿題を残して(15)」と題する記事は、「スポーツ行事を取り巻く社会の反応は、開催地のイデオロギーの影響を受けやすい。シドニー五輪にも、これまでの傾向と向き合う『正しいタテマエ』が登場し、いわゆる『ポリティカル・コレクトネス』が新しい潮流を作った」と指摘し、環境保護団体の活動やオーストラリア国民の「多文化主義」的努力に注目している。杉本によれば、「グリーン五輪」はシドニー五輪組織委員会関係者やそれを支える巨大企業と環境団体との長期にわたる「綱引き」の結果であり、「市民参加」型五輪もまた、人口の2割以上がボランティア団体に所属するという、オーストラリア人の市民的生活習慣に根ざすものであった。シドニー五輪は、多国籍企業と提携したIOCや大会組織委員会だけでなく、五輪に対抗する環境団体の改革要求や参加を求める市民運動に支えられることによって始めて、正義の理念を全うすることができたのである。

杉本は、次のようにも言う。「フリーマンが歓呼を浴びたからといって、先住民の土地問題が即刻解決するわけではない。弱者に焦点が当てられたから、失業者が明日から職を得られるわけでもないだろう、環境との共生や市民の参加といった分野でも、宿題は山積みになっている。シンボルの世界で起こったことと、実利の世界での攻防は、別の問題である。しかし、無関係でもない。」

スポーツは、世界平和や諸民族の融和など、人類の理想をシンボライズすることができる。しかし、それは「虚構」の世界の出来事であり、理想を実現化する社会的な力がそこから直ちに生み出されるわけではない。祝祭の理想は、実生活に反作用を及ぼすことが期待されるのである。

・能動的解釈の可能性

開会式の翌朝の「天声人語」(『朝日』2000.9.16)は、五輪が選手ではなく国家間の競争になってい

ることを憂いながらも、「選手団の英語名称は『コリア』、団歌は『アリラン』。行進ではその『アリラン』が豊かに流れた」と、国家の障壁を越えた南北朝鮮の合同行進を賞賛し、加えて、「聖火の最終走者が、虐げられてきた先住民族・アボリジニーの選手だったのもよかった。」と述べている。

閉会式の翌朝の「天声人語」(『朝日』2000.10.2)は、五輪に対する国民の反応について、「すばらしい日々をありがとう」と、「五輪ほど うるさきものは 世には無し メダル メダルと 夜も寝られず」という、以上2つの傾向があることを紹介し、シドニー五輪の「光」と「影」を例示したあと、「しかし、選手たちが力いっぱい走り、跳び、泳ぎ……成功し、失敗し、喜び、涙する姿に、率直に感動した人も多かったに違いない。4年に一度の『力いっぱい』の光景を目にしていると、こちら元気で誠実さを分けてもらった気持ちになる。」と結んでいる。さまざまな問題があった。でも「すばらしい日々をありがとう」。これが「天声人語」の基本的なスタンスであるといってい

たしかに、スポーツは、見る者に夢と感動、勇気を与える。だが、理想とは本来、「渴望」し、「希求」するものであり、それを阻むものへの戦いと抵抗の姿勢をうちに含むものであろう。夢や感動、理想は、現実との緊張を欠く場合、現実を追認ないし容認することになりかねず、祝祭の場での理想の宣揚は、相対化されねばならないのである。

フリーマン選手(陸上女子4百m)の表彰式をテレビで見たある視聴者は、オーストラリア国歌の大合唱に「それは、国歌というよりも、その大地を愛する人たちの共感の歌声にも聞こえた。」と感激し、ひるがえって「君が代」に思いをはせ、「だれもが気持ちよく歌え、心から一つになれるような国歌があればいいなあ(16)」と実感している。シドニー五輪の理想が、日本に存在する社会矛盾を逆照射したのである。

朝日新聞社に読者が寄せた「内外にもっと重要なニュースはないのか」という批判もまた、理想と現実のリアルな認識を求めている点で興味深い。たとえば、「五輪の興奮にのまれて影の薄れた敬老

の日だったが、……報道がまず目を向けなければならぬのは『真の敬老政策が日本にない』という現実ではないだろうか。(17)」という投書は、単純な五輪批判ではなく、祝祭と実生活、虚と実の明確な区別をメディアに要求しており、「福祉としてのスポーツ」への要求をも読み取りうる。

競争や勝敗に関する観念についても、ある種の成熟を見て取れる。たとえば、真保裕一は、闘争＝進歩という近代の競争観を基調にし、「戦う姿勢を忘れた時、未来への道は閉ざされ、停滞と退廃を招く。」と警告するが、同時に彼は、「努力さえすれば栄光がつかめる」といった単純な競争礼賛を避け、「たとえ栄光を手になくとも、彼女たちの懸命に走る姿は我々を魅了したはずだ。(18)」と、結果ではなく、闘う真摯な姿を重視するのである。そのことと関連して、シドニー五輪を機にバルセロナでのパラリンピック観戦を想起した一読者が、「そこでは障害にかかわりなく、みんなが楽しみ、共に活動する仲間を大切にする姿勢が貫かれていた。そのことは、人が人として生きていく上で一番大切なことであると、私に教えてくれた。(19)」と、競争より共同・連帯を重視するスポーツのあり方を提起している。真保裕一の論調を含め、競争や勝敗に関する考え方が多元化・多様化しているのである。

J・フィスクによれば、文化とはわたしたちが自分の社会的経験を解釈するたえまないプロセスのことである。その解釈によってわたしたちの社会的アイデンティティは支えられている。文化の創出は社会的プロセスであり、それを構成する諸要素は社会体制との関係を抜きにしては意味をなさない(20)。この見解を敷衍すれば、スポーツをどうとらえるかということは、自己や社会関係、社会体制に関する解釈や理解と深くかかわっており、したがって、わたしたちは、スポーツに関する解釈や理解を介して自己を確認し、社会関係や社会体制に意味を付与していることになる。トップ選手の活躍するシドニー五輪は、大衆文化として人々の眼前にあらわれ、視聴や読書、応援や雑談・論評といった社会的経験を介して社会的現実

となる。メディアの報道するシドニー五輪は、わたしたちの経験を介して社会的現実となるのである。マスメディアに依拠しながら、なお、その枠組みを超えて、日常生活とつながりのある自分なりの解釈を行なうことができるかどうか。生活に基礎をおくスポーツ文化の未来は、普通の人々の構想力にかかっているといえよう。

<注>

- (1) 吉見俊哉「メディア・イベント概念の諸層」(津金澤聰廣・編『近代日本のメディア・イベント』同文館、1996年、所収) 参照。
- (2) 「取材記者座談会」『朝日』2000.10.2。
- (3) 「前半にヤマ、視聴率も圧勝」『朝日』夕刊、2000.10.2。
- (4) 「シドニー報告」『朝日』夕刊、2000.10.3。
- (5) 「この感動を次の世代に」『朝日』2000.10.2。
- (6) 「がんばれ」(長崎宏子)『朝日』2000.09.16。
- (7) 「しなやかな強さ 女性にみた」『朝日』2000.10.2。
- (8) 「朝日スポーツ賞特別賞」『朝日』2000.10.2。
- (9) 「この感動を次の世代に」前掲。
- (10) 「人類の前進アテネに引き継ぐ」『朝日』2000.10.2。
- (11) 「サマランチ会長あいさつ」『朝日』2000.10.2。
- (12) 「五輪に託す新世紀の夢 / 開会式」『朝日』2000.09.16。
- (13) 「シドニー五輪閉幕」『朝日』2000.10.2。
- (14) 『朝日』2000.10.4。
- (15) 『朝日』夕刊、2000.10.3。
- (16) 「声 / 競技場に響く共感の大合唱」(無職・西巻弘光。登別市、63歳)『朝日』2000.10.3。
- (17) 「声 / 五輪終わって高齢者に寒風」(演出家・河崎 保。杉並区、77歳)『朝日』2000.10.4。
- (18) 「真保裕一が目 / 戦う姿に魅了され」『朝日』2000.10.2。
- (19) 「声 / 障害者五輪に子供の関心を」『朝日』2000.10.5。
- (20) J・フィスク『抵抗の快楽: ポピュラーカルチャーの記号論』世界思想社、1998年、8ページ。